

古堅太郎

TARO FURUKATA



"完璧な抱擁" サイズ可変 2021年

シングルチャンネルHDビデオ（カラー、サウンド、7分31秒）、
液晶テレビ、額装された新聞記事、ヘッドフォン

Installation view, Each Day Begins with the Sun Rising: Four Artists from Hiroshima,
Benton Museum of Art at Pomona College, 2022. Photography courtesy of Jeff McLane.



"透明な記念館 — 本殿と広島ピースセンター"

19.1 x 20.5 x 12.7cm 2022年

UVレジン

広島における記憶や歴史のデコロナイズに注目しながら、過去の記憶と想起が、どのように行われるのか、さらに、そこからこぼれ落ち、忘却されていく歴史について研究と制作を行う。映像を主な手法としながら、3Dプリンターや3Dスキャナーといったデジタル機器も使用し、再生産される一元的な視点を解体し、戦後の日米の歴史や、帝国主義の記憶の忘却における広島の役割に光を当て、平和都市「広島」の批判的な読み替えを試みる。近年は、丹下健三による平和記念公園のデザインの起源や核技術の矛盾について作品を制作し、国内外で発表している。

1975年広島県生まれ、広島県在住。2001年広島市立大学芸術学部大学院芸術学研究科修了、2008年ポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツに滞在、2010年ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学大学院彫刻科修了。2016年より広島を拠点に活動。主な展覧会に「KANTEN 観展: The Limits of History」(apexart、ニューヨーク/アメリカ、2023)、「基いの町」(オルタナティブスペースコアなど、広島、2022)、「1日は日の出と共に始まる」(モナ大学ベントン美術館、クレアモント/アメリカ、2022)、「透明な記念館」(The POOL、広島、2022)、「都美セレクション《星座を想像するように—過去、現在、未来》」(東京都美術館、2019)、「Artists in FAS 2016」(藤沢市アートスペース、神奈川、2016)等。